
赤い目が見たもの。

MMM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い目が見たもの。

【Nコード】

N7879Y

【作者名】

MMM

【あらすじ】

記憶を失った少女は目が覚めると白い砂漠と真っ暗な空以外何も
ない世界を見た。誰でも感想を送れます。

1・1（前書き）

話が飛んでいるところがあるかも知れませんが、すいません。そこは許してください。

拙く、構成も変なところがありますがよろしく願います。

また、指摘したい場合はいつでもお願いします。

何も無い、ただ丸い月だけが光っているロマンチックの口の字もない寂しい夜空の下で私は目覚めた。

白い月の明かりが眩しく感じたのはたったの数秒。

猫のように腰を曲げて横たわっている私がまず見たのが白と黒の境界線だった。白い砂漠と真っ暗な夜空が混じり合うことなくただ対立しあって見える。

寝ている間に入ったと思う口の中の砂を咳で吐き出す。砂の味はじやりじやりしていてそことなく気分が悪かった。

それから長い黒髪に絡まった砂を落とす。絡まっていた砂は思ったより少なく髪を少し揺らしただけですべて落ちた。

まだ疲れているのか、単に起きたばかりで頭が機能してないのか横たわっていた体を上半身起こしたまま私はぼんやりとしていた。頭が痛い。それだけ思っていた。

私がぼんやりと眺めていたのは、いつまでも続く白い砂漠と闇に包まれた夜空。それしか見るものがなかった。

ぼつりぼつり岩や枯れた細い木が見えたがそんなのは無いに等しいぐらいに見える。

少し目を凝らして見ると何か動くものが見えたような気がしたけど気のせいだと思って無視した。

それから景色を眺めてぼんやりと脳が機能するまで眺めていたけどやっと少し頭が活動したところで気づいたことがあった。

ここ、どこだろう。

少し不安になった。こんな見知らぬ場所になんているのだろう。

無意識のうちに理由を脳に検索しても出てこない。それ以前に、自分が自分が起こしたことについての言わば前に何の行動をしていたかの記憶を持っていないことにやっと気が付いた。

あれ、なんで記憶がないの？ 私、寝る前は何をやっていたの？ そんな質問が自分の中で飛び回る。質問には記憶が無いのだから当たり前だけど答えられなかった。

答えられないと理解しているはずなのになぜか未だに質問を自分の中で忙しく飛び回っている。

色々と推測と言うより想像はいくらか考えられる。でも正確な答えは出せない。出せられるはずがない。

今の私の脳はマシガンのようにどんどん出て来る質問とそれに対する数多くの推測でこんがらがっている。

「ああ、もっつ！」と叫んで自分の髪をくしゃくしゃにしてみる。髪はすぐに元には戻られなかった。

私はしばらくの間、少し自分を落ち着かせることと髪を戻すことに時間を掛けてしまっていた。

少し落ち着いた後、重く感じる体を無理矢理立たせて歩いてみる。考えても理由なんて出てこないのだから今は気分を少しでも良くした方が良くと選択し、判断した。

歩いてみると汚い布きれを見つけた。私は少しだけでも肌の露出を抑えようと体を纏うとあることに気が付く。

胸にすっぽりと綺麗に丸い孔が開いていた。

人間には普通、胸とかに孔なんて無い。

でもなぜかそれが当たり前のように感じている。何でだろう？

新たな疑問を抱えながらも布が落ちないようにしっかりと結んだ。

それからもぶらぶらと歩いて行き疲れたら座って休み、少し休んだらまた歩いて疲れたらまた少し休む、のループを繰り返していた。歩き出してから長い時間が経ったと思う。十時間以上ぐらい。それでも地平線までずっと白い砂で出来た砂漠だった。それより景色

が変わってないように見える。目の錯覚だと思うけど。

「……………疲れたなあ」

実際こんな歩いていたら途中休みを少し入れても疲れるに決まっている。

そのため今日ここまでにしようと思い、体に纏わせている布が切れないように横たわって目をつぶる。

……………眠れる気がしない。とても疲れているのに。

どうも頭の中がまだ疑問の海で覆い尽くされている。記憶のことについては起きたばかりの時よりは気が少し楽になったためか減っている。

今の主役の疑問はこの世界について。

自分の体内時間でおおよその時間だけど十時間は歩いたのに太陽は昇ってこなかった。月はずっと同じ場所にいる。それとずっと歩いていたのに生きているものを見つけることが出来なかった。

後は、自分の存在について。

なんで私の胸には孔が開いているのに生きていられるのか、なぜあんなところで寝ていたのか、等々。そんな内容が頭を蹂躪していた。

この世界は疑問が多すぎる。そのほとんどが常識から離れていた。考えれば考えるほど眠気を誘っている脳がどんどん起きてしまったので考えることをやめて目をぎゅうとつぶった。

今度こそ眠れますように、と思いつながら。

あれからどれくらい寝たのだろう。月は寝たときとずっと同じ場所にあるのでどれくらい経ったのか分からない。

欠伸を出し、目をこすって付いた目やにを落としてから周りを見渡してみる。何の変化もなかった。

体は寝たときよりも疲れているように感じる。だるくも感じた。歩くことにも無意識に体が嫌がる。

寝不足、という訳でもないのに。自然な目覚めをしたはずなのに。

またもや疑問が増えてしまった。

それでも何かが見つかるかも知れないと思って無理矢理体を立たせて昨日より少し遅めのペースで歩く。

それでも体は嫌がって進まないの横になって体力が回復するのを待った。

だけど横になっても体力が回復するどころか減ってきている感じがしている。

考えることも少しずつ億劫になってきた。

どうしよう、私。このまま死んじゃうのかななんて一瞬思ってしまった。

そんな考えはすぐに頭の中から捨てる。

そんなとき、後ろか砂を蹴る足音がじゃりじゃりと聞こえた。

「……………」

私はやっと人に会えるのかと思って聞こえた方へ目を向く。

振り向いて見えたものは

胸辺りに綺麗にすっぽりと丸い孔が開いている異形の化け物がいた。

顔と思われるところには仮面らしきものを被っていた。息は少し荒く外見が影であり見えないためか怖さを強調している。

私はその化け物を見たとき一瞬怖じ気付いたがすぐに違うことを思う。

血が飲みたい、と。

渴望に似た感情を感じていた。歯が今すぐにも化け物の首筋に行こうとするかのように震えている。

化け物は私の顔を一瞬見て咆哮をする。それから私に向かって襲

いかかった。

私は欲望に負け、化け物が手を振りかざす直前までタイミングを讀んで化け物の後を取り、背中にしがみつく。そこから首のところまで少し上る。

化け物は落とそうと激しく体を揺らしたが私は必死にしがみついていた。

首のところまで行くと私はすぐさま歯を立てて欲望に従って頸動脈に噛みつき、血を吸う。

血を飲んでいると体力が戻りだるさは消えていった。それよりも私は、

(美味しい……………)

と満足していた。体を揺らして私を振り落とそうとした化け物はみるみる力を抜き、倒れる。

化け物から離れた私は口の中に残っている血を堪能していた。

けど、ここでやっと気が付く。

今、私は、何を、した？

今やったことに口を手で押さえ立ちすくむ自分。倒れて息をしない化け物の亡骸。

口の中を未だに血が広がっている。

今の気持ちは満足感半分、罪悪感半分。

でもなんでだろう、こんなことをしたのにこれが当たり前だと、考える自分がいる。

まただ、なんでそう考える？ 今、私は命を奪ったのに。奪ったのに。

自暴自棄になりかかっている自分に気づき、落ち着こうと深呼吸を三回ぐらいやった。

それから落ち着きを取り戻した私は今の戦いで疑問に思ったことを考える。

あの化け物の胸には孔があった。それは同じく私の胸にも丸い孔がある。

するとこの世界は生きているものは胸に孔が空いているのが当たり前なんだらうか？
寝るまでずっとそのことを考えていた。

1・2（前書き）

よろしくお願いします。

少し細かいところを訂正しました。これからもよろしく願います。

あの化け物を吸い殺してから数日が経った。

私は何も変わっていないかのように白い砂漠の上をずっと歩き続けている。

間違えた。何も変わっていないのは違うな。

変わったと言えば私が化け物を殺した次の日から砂漠で歩いていると時々化け物が襲うようになった。そのとき私はすぐさま全力で走って逃げるか、少し血を吸っていることにしている。

私はどうも特異体質であって何日かに一回以上、一定量の血を飲まないと体調が悪くなる。そして限度を超えると血を飲みたいと渴望を感じてしまうらしい。あの化け物を殺した後も何回か吸い殺してしまったのでそのことに気が付いた。

血を飲むことはどうも嫌気がした。でも血を飲まないと体調が悪くなるしそれに、化け物だとはいえ殺してしまうことも嫌だった。

だから仕方なく化け物に会ったら血を吸うことを時々している。

余談だけど時々化け物同士で殺し合っているところを何度か目撃したことがあった。

化け物達は頭を食い千切ったり、締め殺したりなどして殺しあっている。なぜ同族が殺し合っているのか分からない。分からないけどあまりの残虐さに私はその光景を見ることが出来なくなってしまった。

話は変わっちゃうけど、私は変わらず考えていた。この世界について。あの化け物達のことについて。そして　自分の存在について。

歩いている時も寝る前の少しの間でも、考えることはほとんどそれに当てられていた。

なぜこの世界はずっと夜なのか、私や化け物の胸には丸い孔が空

いているのか、などそんな疑問が頭の中で飛び回っている。

その疑問に対する推測は建てられてもほとんどが妄想でいたりしていた。なので最後は考えても仕方ないと思って目をつぶる。

そんな日々が続いた。

今日も月の光が少し眩しく感じた。起きたばかりの私は手を目に当てて光を遮る。

それから立つて体を纏っている薄汚い布きれを確認する。体を纏っているものがこれしかないから切れないように大事にしている。

いくらまだ一度も人に会っていないくても体をさらすことは嫌だった。それから完全に頭が覚醒すると当てもなく広く荒涼とした砂漠をいつも通り考えごとをしたり、今日こそ誰かに会えるといいな、とそんな淡い願いを持ちたりしながら歩く。

いつも考えているので時々出会う化け物に気づかないことがたまにあつたから、今日は気を付けようと思いつながらも。

そしていつものように少し疲れたら休んでまた歩く。その繰り返し。

そんな誰も見つからず一人歩いていると思うこと。

(寂しいなあ……………)

それだけだった。他には何も思わない。孤独はこういうものなんだと私は初めて知った。

普段なら眠くなるまでそうやってしていたけど今日は違かった。

眠くなる直前になにかしら宮殿らしきものが見えた。

宮殿は一部崩れており中からなにか光が見える。

もしかしたら人がいるかも知れない！

そう思った私は疲れなんて忘れてその宮殿に一直線に走っていった。

……………近づいた気配すらない。

走っても走っても宮殿が大きく見えてこない。一瞬自分の目がおかしくなったのかと思ってしまっぐらいに。

起きた時から休みは入れたもののずっと歩いていることもあるので流石に体力がもう切れそうだったがそこは気合で走る私だった。

宮殿の側まで走り切った私は肩で息をしていた。膝に手を乗せ体重を掛けながら息を整える。

宮殿に目を向けると感心してしまった。

ここまで大きかったんだ。

あまりの大きさだったから距離感が狂ったんだ。私はそう思う。息が整うと早速宮殿の中に入る。

中に入ると昼間のような明るい日光らしきものが降り注いだ。

夜に慣れていた私は今日起きた時よりも長い時間手で光りを遮る。やっと目が慣れると辺りを見回してみる。とても広い。

宮殿の中にも何個かの白い宮殿があるのにそれでもまだとてつもなく広がった。

敷地はそのまま白い砂漠のまま。

誰かいるかな、と期待をしていたけど気配がなくながっかりする。

私はまだ一人ぼっちなんだ……。

そう思いながらも疲れた体を動かして寝る場所を探そうと辺りを歩く。

まずは白い宮殿の中へ風漬しに見る。

壊れているところがほとんどだったけど、一つだけ綺麗なところがあった。

中も全部白で統一されている。白い小さなクッションが三つほどあっただけであとは何もなかった。

今日は贅沢にクッションという柔らかい羽毛が入ったものを枕にして眠る。

次の日は宮殿の中をちよつと探検してみることにした。

まずはとても高い塔があったのでそこに行ってみることに。

入り口からすぐに螺旋階段が見えたのでひとまず登る。

……登らない方が良かった。

なめて掛かった私は多分四十階ぐらいのところまで疲れる。私は上を見上げて計算してみると、あとおよそ二十階ぐらいはあるように見えた。

それでも最上階へ登り切った私は部屋の中を見る。何十、いや何百？ いやもつとかなと思うぐらいの人が入れそうなくらいの広さだった。

何か大地震が起こったかのように柱は何本か折れている。床は所々穴が開いている。

玉座らしき椅子はとても高いところにあつて昔ここに住んでいた王様が部下を見下ろすような視線を送っている景色が頭の中で浮かんだ。

その玉座のところに行つて座つてみる。玉座は何か大理石みたいな素材で出来ていてひんやりと冷たかった。

少しだけ王様になった気分になったけどそんな気分はすぐに消える。

誰もいない。

そんな事実があつた。

急に寂しいという単語が頭の中で繰り返し言われる。

何十秒かそんな雰囲気を出していたがすぐに思い直して玉座の間から出て今度は階段を下りる。

最下階まで降りて出ようとしたときに丁度床が腐っていたのかは分からないけど、私は踏んだところの床が崩れて落ちてしまった。

どしん。

「いてててて……」

私はお尻から落ちたから幸い怪我はなかったけどお尻が痛かった。しかも纏っているものが薄い布きれだから余計に痛く感じる。

私が落ちた穴に続いていたのは小さな部屋。

その部屋は薄い青の光が包まれていた。

私は階段がないか辺りを見回すとふとなにか円柱の形をしたもの

を見つける。

そこから光が発していると分かって近寄ってみる。すると急に威圧感を感じて一瞬怖じ気付いた。

何だろう、今のは。

そう思ってもう少し近寄ってみるとそこには。

セミロングの白い髪を持ち、お腹には私と同じ孔があった少女が拘束具を付けて水槽の中にいる。

彼女は酸素マスクを装着していて、目は開いていない。

私はその少女を見たあと、頭痛が襲う。

水槽、酸素マスク、水の中、睡眠導入剤、e t c .

頭の中で何かがい出しされようとした。したのだけと思い出されなかった。

何秒かして頭痛が治まると少女の方に目を向けるとさっきと同じような威圧感を感じた。

この少女から発しているのかな……？
でも少女からは意識を感じられない。眠っているようにしか見えなかった。

水槽のガラスに触れる。

ガラスを割り叩こうかな。ふとそんな考えが出てきた。

でもなぜだか分からないけどガラスを割ったら少女の何か死んじやうような気がして。

少女から一歩ずつ、一歩ずつ離れて再び階段を探す。

階段を見つけると何も考えずに急いで登った。すぐさま宮殿の中に続いていた。

そして宮殿の中の日に当てられながら私はこう思う。

あの少女は何だったんだろう？ と。

1・2（後書き）

どうも書いているとふとアイデアが降ってきて方向を変えることがあります。構成にも書いてないことを一発で書くので少し時間がとられました。

1・3(前書き)

よろしく願います。

上から床が崩れ落ちた音がして、それから高い声の悲鳴が聞こえた。

水槽の中にいる白い髪の少女はその音で起きたかのように目を細く開けている。

一瞬少女は白衣を着た死神がもう来たのかと思ったがその考えは次の光景を見て消え去った。

一人の薄汚い布きれを纏った少女と同じ破面の黒く長い髪を持った少女が座り込んでいる。

多分踏み外して床が抜けて偶然入ったのだろうと推測した。

そして黒髪の少女は首を回して辺りを見回している。いきなり床が抜けたのだから混乱しているのだろうと白髪の少女は思った。

混乱から直ったのか黒髪の少女は立って白髪の少女の方へと歩き出す。

黒髪の少女がこちらに歩き出している時に見た顔は、整った顔立ちに赤い目だった。

ずきん。白髪の少女に頭痛が襲う。

この不思議な感覚は何だろう？ どこかで出会ったことがあるような無いような……

白髪の少女は曖昧な感覚を感じている間も黒髪の少女は少しずつ白髪の少女の方に近づいている。

黒髪の少女が白髪の少女が入っている水槽へ着く直前に強烈な眠気が白髪の少女に襲う。

白髪の少女の目蓋が少しずつ重くなる間に白髪の少女は、あともうちょっとで思い出せそうなのに、と思った。

そして白髪の少女は水槽の中で再び眠りにつく……………

私は宮殿の中にある高い塔から出た後、他の見てないところにし回って見た。

別になんの変哲もないのですぐ見終わる。そして今日でこの宮殿の内部の半分が見れたので明日は残りの半分を見ようと思い、昨日寝たところに戻る。

今日は枕代わりに使っているクッションを堪能しようと欲張って三つ使った。一つは枕に、もう一つは足のところに、そしてもう一つはお腹の上に置く。

今までは砂漠の上で寝ていて枕も腕を使って寝ていたから起きるときとても痛かった。でも今はクッションがあってもここにあったクッションは柔らかすぎず硬すぎず、丁度良い柔らかさで触り心地が良かった。あまりの心地良さを十分に味わえないまま私は眠ってしまった。

そんな少し豪華な寝方をしている最中で私は夢を見る。

自分自身が水槽の中に閉じ込められているところの夢。

手首と足首には拘束具が付けられて口で酸素ポンペを加えている。まるでさっき見た白髪の少女と同じだった。

そんな夢の中で私は必死に水槽から出ようとすると強烈な眠気と脱力感を感じて力が出ない。そして一定間隔で白衣を着た何者かが私に無理矢理薬を飲ますようにしている。

私は必死に抵抗するけどやはり眠気と脱力感を感じ、拘束具で手足の自由が奪われているため薬を飲んでしまう。

そうなる体調が悪くなって苦しくなる。横目で見てみると白衣を着て水槽の外から眺めている人たちは私が苦しんでいるところをケラケラと笑って面白がっていた。

そんな姿を私は消えかけている意識の中でただ眺めているだけ。

「あああああああつ！」

私は大声を上げて起き上がる。体は汗でべっとりとしていた。呼吸は荒かったが少しずつ落ち着いていつている。

「……何だったんだろう、今の夢は」

きつと昨日見たあの白い髪の少女が原因かな。昨日はあの子を見てからずっとあの子のことを考えていたから。

そう思っ私は肩の力を抜いて部屋を見渡す。

昨日は色々あったなあ。少し疲れたよ。

そう考えると不意に自分の体調が悪いことに気が付いた。

まだそこまでは悪くない。ちよつと体が普段より重く感じるだけ。でももうそろそろ血を飲まないとまた暴走しちゃってまた命を一つ奪ってしまう。

そう思い、血を飲むため部屋を出る。

出るとこの天井が青い空に見える宮殿はとてつもなく大きいため出口を探すことに時間が掛かった。

その間にも私の体調は少しずつ悪くなってきている。

今は吐き気が少しするぐらいで治まっているけど油断出来ない。

頭の中では急ごうと思いつながら出口まで歩いて行く。

でもやっぱり遠いので出口まで行くのに四十分ぐらい掛かった。

久しぶりに宮殿の外に出た。

相変わらず空は夜の闇に囲まれていて月が白く光っている。

化け物を探すことにも時間を掛けてしまった。

おかげで体調がどんどん悪くなっている。

でも化け物が群れているからわざわざ一体ずつ探さなくても良くなつた。

化け物と交戦して何とか首筋のところを噛んだ。

そして自分の理性が飛ぶ前に化け物血を飲む。

……相変わらず血の味は不味い。鉄をなめた味がした。

血を渴望している時はとても美味しく感じるのにそれ以外の時は

不味く感じている。

空腹は最高のスパイスとか言うけどそういう感じなのかな。なんか違うような気がするけど。

少し経ってからも口の中は血の味でいっぱい苦痛だった。

そんな風を感じながら宮殿に戻ると一人の女性が垂直に立っているところを見た。

金髪の髪が少し揺らいでいた。後ろ姿なので顔は見えない。

私はやっと人に会えたと心の中で喜んだ。

「あろう……」

私はひとまず声を掛けてみる。すると金髪の女性は気づいたのか後ろを振り向いて、

「名は何だ」

と凜とした声で短い質問をした。

女性は褐色の肌で服は胸の下半分からお腹に掛けて露出している。

その代わり顔が服で顔が下半分隠れている。

「わ、私ですか？」

「そうだ」

そうだ、と答えられて私は自分の名前を答えようとする。だけど。

あれ、私の名前、なんだっけ？

自分の名前を忘れていた。

私は必死に記憶の中を探る。

確か、私が一番はじめに起きた時、名前だけ覚えていたはず。

必死に探して探して探してやっと自分の名前を思い出した。時間は一分ぐらいだった。

名乗ったこともないし、自分の名前を使うこと無く一ヶ月過ぎたから名前を忘れることはあるよね。

そう自分の中で無理矢理納得したあと、女性に自分の名前を告げる。

「私の名前は」

初めて使う自分の名前。記憶を失う前は使っていたと思うけど記

憶を失ってから初めて使う自分の名前。 私は少し間をとって、

「アリア・デューク、です」

女性は私の名前を聞いたあと、女性も自分の名前を答えた。

「ティア・ハリベルだ」

こうして私はティア・ハリベルさんと知り合った。

「私、記憶喪失なんです」

私はきっぱりハリベルさんに言った。

ハリベルさんが私に分からないことを話しても私は知っているかのように相づちを打つかも知れない。

そう思っすぐに打ち付けた。

「……」

ハリベルさんは何も言わない。ただ静かに瞳を私の方に向けているだけ。

「だから私、自分のことよく分からないし、この世界の常識なども分からないんです。だからなにか教えてくれませんか……」

ダメ元で頼んでみる。ハリベルさんの顔を少し伺っていた。

「……良いだろう」

静かに承諾の返事が来る。

私は唾を飲んで話しを聞く体勢にする。

そしてハリベルさんが静かに口を開けて話す。

「今から五年前、虚と死神の戦争が起こった」

1・3 (後書き)

構成を少し考えていたところ、話が少しの間、日常系になりそうです。現世での。もちろん、デューク、入っています。

ああ、早くデュークを現世に行かせたい！

1・4(前書き)

よろしくお願ひします。

「せ、戦争ですか」

「……そうだ」

ハリベルさんの言葉に驚く私。いきなり戦争という言葉が出てきたら知らない人たちは驚くと思う。

でも、分からない言葉が二つ出てきた。

ホロウ 虚、しにがみ 死神。

この二つの単語の意味を考えても思いつかなかった。

イメージ的に死神は、俗に鎌を持っていて人の魂を狩る人たちかな。虚の方は、イメージ出来ない。

「……すみません。ハリベルさんの言っている虚とか死神の意味が分かりません……」

思い切って質問するとハリベルさんは無表情で、でもかすかに驚いたような顔をした後、少し考えるように腕を組んだ。

それから口を動かして、

「……本当に知らないのか」

「はい、分かりません」

「……ではそこから話そう」

そしてハリベルさんは私が知らないことを話してくれた。

ただハリベルさんの話には私は何回も頭の上に？がついた。

はっきり言えばその、なんて言うか。もう私達は死んでいることを前提にして話しているのだから。

虚は人の魂を捕食する、とか中級大虚アジューカスは同族の虚を喰らい続ける

ことによって退化を防いでいる、とかそんなあほなことがあるかと思うようなことがたくさん出てくる。

そんな訳の分からないことでも必死に理解しようと聞いている私は頭の中で整理してみた。

このずっと夜のこの世界は虚圏ウエコムンドと言い、虚という仮面を付け胸に孔がある化け物が住んでいる。虚は人間の魂魄を食べる。ただ、その中でも稀に虚を食べる虚がいて、その虚は虚を喰らい続けるうちに大虚という虚が進化したものへとなる。

大虚には三つの種類があつて、一つは最下級大虚ギリアンと言い、数は多く大虚の中でも一番弱い大虚。他の虚の魂を喰らっているため、意識が混ざり合つて知能は獣並み、動きは緩慢ですべて同じ姿、同じ仮面。そういう最下級大虚はここで進化が止まるが、ごく稀に個を持つた最下級大虚がいる。

その最下級大虚は明確な意識を持ち、進化するために他の最下級大虚を喰らう。そして中級大虚アジューカーへと進化する。

中級大虚は個体ごとに容姿が違い、体の大きさも最下級大虚と比べるとやや小さい。知能は高く、戦闘能力も最下級大虚の何倍にもなるらしい。

中級大虚も同じ中級大虚を喰らいあう。そうしなければ最下級大虚に戻り、永遠に中級大虚になれないらしい。そして極一部の中級大虚は中級大虚を喰らううちに最上級大虚ヴァストローデへと進化する。

最上級大虚はほぼ人間の容姿と同じらしく、戦闘能力は隊長格の死神に匹敵するぐらい。この広い虚圏の中にもたつた数体しかないらしい。

そして
「……そして私達破面アラソカルはその最上級大虚の進化先であり、戦闘能力もそこらの大虚ではすぐに殺せるぐらいだ」

ハリベルさんの話も一区切りした。ハリベルさんの話を聞いた私は、

「つまり、私達は人間ではないんですか？」

そんなことを聞く。答えはもう頭の中では分かりきっているのに自分の中では否定し続けている答えしか浮かび上がらない。

「……そうだ。私達は人間ではない。虚だ」

ハリベルさんは冷静に聞きたくない答えを言った。私は一回ふうとため息をついて、次の質問をする。

「……次にハリベルさんが言う死神とはなんですか」

「……私達を殺す魂魄だ」

その答えですぐにさつきハリベルさんが言っていた死神と虚の戦争のことを理解した。ハリベルさんの言った戦争とは虚達が何らかの理由で結団して死神に対抗するうちに戦争になった、ということなのだろう。

私が考えた推測が合っているかどうか確認するため、質問をした。「さつきハリベルさんの言っていた虚と死神の戦争のことを詳しく聞いてもいいでしょうか……」

「……私達、破面は藍染という死神に仕えていた。十刃の第三十刃^{エスパーダ}として」

なんか矛盾している。

「なぜ死神に仕えていたのですか？ 死神は私達にとって敵なんじゃない？」

「……力を与えられたのだ。犠牲無き世界を作るためには必要だ、と。だが、藍染は破面を裏切り、私を殺そうとした。だがかるうじて生き残ってこうして虚圏を彷徨い歩いている。部下達と一緒に」

「部下ですか……。今はどこに？」

「今は私と部下達が使っていた宮に戻っていると思うが。……それと思ったことがあるのだが」

「なんですか？」

「デュークは斬魄刀を持っていないのか？」

斬魄刀……。ハリベルさんが背中中に担いでいる刀のことかな。

「持ってないですけど……。必要なんですか」

「……もし死神に逢い自分の能力を解放しなければならなくなった時に必要不可欠なものだ。ないのなら作れるがいいか？」

死神に逢う可能性はあるかも知れないし、もし虚に襲われたとき

の対処もしなければならぬから。でも血、飲まなきゃならぬからまあ、あくまで死神と戦う時に持つておこうかな。

「お願いします」

私がお願いとハリベルさんは黙って立って歩いた。私はハリベルさんの後についていった。

ハリベルさんには、歩きながらも色々教えてくれた。

たとえば人間が住む現世の行き方とか虚閃セロの放ち方とか。

そして色々教えてもらっているうちにハリベルさんが立ち止まる。

そこは数ある塔のうちの一つの中にある部屋だった。

その部屋にはなにかすべて同じような刀が沢山あった。

「……あそこにある刀を一本取って靈力を流すんだ」

ハリベルさんの言うままに刀を一本取り気を集中して刀に力を込める。すると刀が少し赤く光り、その状態が少しの間続いた。

そして自分の周りから空気がなくなるような感覚を感じる。刀がもっと赤く光るようになった。

「その調子だ」とハリベルさんはつぶやいて私はもっと気を集中する。

今度は何か自分の中から何かが抜ける感覚を感じた。そう何かですっぱりと自分の中から……。

それから自分の体が空気みたいなものに包まれて刀すら見えなくなつた。

気が付くと私は横になつていて刀を握りしめていた。ハリベルさんは仁王立ちで私を見ながらぼつりとつぶやく。

「……成功だ」

そう言われて私は自分の斬魄刀が出来たことを理解した。

斬魄刀を見てみると変化前より少し長く見え柄のところが変わっている。

「……それでデュークの斬魄刀が出来た。私は部下達のところに戻る」

ハリベルさんはそう告げて部屋を出る。

「ありがとうございます」

お礼を言つとハリベルさんが何か言い忘れていたかのように部屋に戻つて、

「……服は今いる部屋のもう一つ上の部屋にある」

それだけ言い残して再び部屋を出る。

私はすぐに上の部屋に行き、着る服を選ぶ。服の山にあった服はすべて白い服だった。

白い服だけとすべて同じと言う訳でもなく紋様がついていたりハリベルさんが着ていた服みたいに露出しているような服もあった。

私は同然全身服で体を隠せる服を選んだ。体を露出していることって誰も見てないところでも恥ずかしく感じたから。

自分の斬魄刀を作つて服を着てから私は自分が寝泊まりしている宮へと戻つた。

斬魄刀が出来てから体が幾分軽く感じるようになったけどその分疲れを感じていて眠気が襲ってくる。

昨日と同じようにクッションの海へダイブし、寝転がった。

そしてふとこんな考えが出てきた。

現世に行つて見ようかな。

記憶の手かがりになるかも知れない。死神に襲われた時は少し戦つて隙を見つけて逃げれば良いし。

それに楽しそうだし、色々と。

足をばたつかせながら考えてみて、現世に行くことを決めた。そしてとても疲れたのかそのまま深い眠りの中に入っていった。

それから私が起きたころにはもうハリベルさんはいなかった。全部見て回つた訳じゃないけど、何となく気配で分かった。

また、この大きい宮殿の中は静寂に包まれて寂しく感じる。きつと昨日ハリベルさんといたからだと思つた。

そして私も今日、この宮殿から離れる。何日間かしかいなかった

けど何かと愛着があった。あの丁度いいクッションもずっと持っていた。
行きたい。

いや、持って行っちゃおうか。現世には当分野宿しそうから。でも、ずっと手に持っていなきゃ行かないし……

うんぬん考えて結局持つて行かないことに決めた私は、深呼吸した。

記憶が無い私にとっては初めて行く場所だ。少し興奮していたから、一度落ち着ける。

……よし、いける。

私は自分の斬魄刀を腰に付けそしてとんつ、と空気に触れるように手を動かす。すると空間が裂けてブラックホールみたいな空間が生まれ、私はその中へ入っていった。

1・4（後書き）

無理矢理デュークを現世に行かせました。あれしか無かったんです、自分の中では……！

あと、今回独自設定を入れました。無理矢理と。すいません、無理矢理ばかりです、今回。

2・1(前書き)

よろしく願います。

時間はデュークが虚圏で目覚めるより少し前に戻り、場所は変わって尸魂界。ソウルソサエティ

藍染との空座決戦が終わって早五年。今、死神達は何もなかったように生活している。

その中で一人、十三番隊の隊舎の裏庭で暇そうに仰向けになっていた青年がいた。

裏庭の花の香り漂う中で青年はずっと一時間くらいは空を眺めて考えふけていた。

青いなあ……

青年がそんなことをぼんやり考えていた。藍染騒動から何も仕事が出来なくなってしまった。何せ、藍染騒動から大きな事件が起きたという訳でもなく残っているものは書類を片付けることしかない。

あの藍染騒動の後、藍染は捕まって刑を執行中だし。他の人たちも何かと修行しているらしいし。

俺だけこんな風にぼんやりしてもいいのか……と思いつく。

だけど、暇なものは暇で、修行と言ってもどうすればいいのか。

誰かに付けてもらうと言っても友達いないしな……

そう思いながらもこうやって寝転がっている。

十三番隊の隊舎は現在静かだ。

朽木副隊長は用事で現世に行っているし、十三番隊の隊員のほとんどは現世での駐在任務などで出払っている。

暇だ。

ごろりと体を横にして近くにある花の香りを香ってみると鼻が強い刺激に襲われてくしゃみをしてしまった。

しばらく鼻のむずむずを抑えて少しむずむずが治まると十三番隊の隊舎から青年の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「湖倉、ちょっと来てくれるかい？」

浮竹隊長の声だった。

「なんだろう？ 浮竹隊長が俺を呼ぶなんて珍しいなあ。そう思いながら青年は裏庭の花を踏まないように走った。」

十三番隊の隊舎にある隊長の部屋に入ると浮竹隊長が正座で座っていた。

俺に何の用事が……

そう思いながらも浮竹隊長の正面を向きながら座る。

「来てくれたね、湖倉」

浮竹隊長は陽気に話しかけた。

「隊長、俺に用事ですか……？」

「君に頼みたい仕事がある」

浮竹隊長は急に真剣な顔になって話す。

「先日、十二番隊隊舎および研究所の爆発は知っているね？」

「はい……」

三日前に十二番隊の敷地内で爆発が起こった。

研究所からの爆発によって十二番隊隊舎の方まで被害が及んだ、

と言う話は聞いているけど。

「その爆発の際に逃げ出した研究材料があるらしく、その研究材料

を探して欲しい、とのことだ」

「十二番隊は生き物を研究材料と言うのか。未だに十二番隊は苦手だ。」

「なんで十二番隊の手助けをしなければならぬのですか？」

「他の隊からの救援だからね。断る訳にはいかないし、断る理由も

ないだろう？」

浮竹隊長はウィンクを俺に向けてした。

「やってくれ、というサインだ。」

「……全部で何体見つければいいのですか？」

「やってくれるのかい？」

「やっとなら仕事ですから」

浮竹隊長はすまない、という顔を俺に見せる。

「仕事、と言ってもほとんどは見つかつたらしいが後、一体見つからないらしい。君には、その最後の一体を探して欲しい」

「……危険なものなんですか？」

出払っているとはいえ、少しは隊員は残っているはず。隊員にこの仕事を任せない、と言うことは危険なことであると思えない。「そうだ。危険なものらしくしかも現世に逃げた可能性もあるらしいから、君にはまず瀟霊廷内から探してもらって、いなかつたら次は現世を探して欲しい」

俺は予想以上に大きな仕事だと思った。

「現世に行けるのですか？」

「そつらしい。多分、虚だとは僕は思うけどね」

隊長はため息をつく。

「虚ですか……、倒さず捕まえなければならいのですか？」

「いや、十二番隊からの連絡では、どつちでもいいらしい。でも強いと思つたら無理をしないこと。いいね？」

「はい」

俺は短く返事をした。

早速俺は瀟霊廷内を歩き始めて、まずは人目の付かないところから探し始めた。

霊圧など感じられなかつたので霊圧を閉じて逃げていると思つて深い森の中や虚が住むと言われる洞窟などをくまなく探す。

……森では、迷子になりそうだったし、洞窟では本当に虚が出たから最初は驚いて腰を抜かしてしまった。

あのときは本気でびびつた。もう心臓が張り裂けそうになつたぐらい。

表現は大きかつたかも知れないがそれぐらいだと思つてもらいたい。

まあ結局、森では奇跡的に出られたし洞窟では無事に虚を倒し

た。結果オーライ。

でも無駄に時間を使ってしまった。もう夕日が見えてきたので一旦今日はこの辺で終了。

翌日も瀟霊廷内を探し回る。

朝の静けさと少しばかりの寒さが寂しさを感じさせた。

何も面倒臭いことをしなくてもいいものがあれば……、と欲してしまうのが頭の中から振り払う。

なんせやつと来た仕事なのだ。暇を持て余すよりはまだ。

今日も瀟霊廷を駆け回って疲れては休んでまた走って……

そんな日々が何日も続いた。

結局半月探しても見つからなかったので現世に行くことに決めた。でも穿界門を開いてもらうのにお金が掛かるのは、ちょっと。

仕事の報酬も交通費込みで後払いつて、どうということだよ。先に払ってくれよ、交通費。

そんな文句は心の中に閉まって地獄蝶を持つ。

ひらひらと紫色の羽を動かしていく地獄蝶が一瞬可愛く見えた。

それから穿界門が開き、俺は一気に走り出す。

地獄蝶を持っていることにより現世と尸魂界を繋ぐ断界を安全に通ることが出来る。

ただ見た目は壁がどろっとして見えるように見えるがもう慣れてしまった。

断界を走り抜けて光が見えた。そろそろ現世だ。

俺は一気に走り抜け、光の中に入る。すると空中に放り出されて

なんで！？ 普通は現世の道路とかに開くの！

でも空中で一回転してからまるで空に立っているかのように立ち止まる。

ふう、良かった。でもなんであんな場所に？

そう少し運がなくなってきた青年は寢床を求めて現世の夜の中を

歩き出した。

歩いてても同じ建物がいくつも連なっているかのように見える。

尸魂界でもそういう風に見えるけど、こっちは余計に無機質に見えると言っかなんというか……。そんな感想を持った。

それから数十分歩いているといつの間にか現世では何度かお世話になっている浦原商店に来ていた。

今回も宿泊してもいいか頼もうか、でも夜遅いし……。どうしようか。

結局朝の九時ぐらいに店が開いて鉄裁さんに起こしてもらったまで寒い秋空の中で野宿していた。

2・1（後書き）

今回は死神のお話を。難しかったです。台詞が。変かも知れませ
ん。そこは許してください。まだ未熟者ですゆえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879y/>

赤い目が見たもの。

2011年12月18日03時10分発行